

## 室町時代における『万葉集』享受の研究

早稲田大学文学研究科博士後期課程 甲斐温子

本研究は、「室町時代における『万葉集』享受の研究」と題し、中世のなかでも特に室町期において、万葉集がどのように生まれ、利用されたかという観点から論を展開するものである。

本論における「室町時代」とは、室町殿(足利將軍家)の家督。現役であることを意味しない。)の権力が確立する十五世紀初頭、三代將軍足利義満期から、十六世紀末の幕府滅亡までを念頭におくものである。すなわち、南北朝期、戦国初期を含む広義の室町時代を想定するものであるが、論中では、主に応仁・文明の乱以降に編まれた万葉集の大規模な類纂本を集中的に取り上げており、時期としては室町末期が中核を成す。

万葉集の注釈は早くも平安末期には著され、以降も時期による差はあるものの、何等かの形で今日まで研究と利用が続けられてきた。したがって、その享受史を論じる研究も繰り返し行われ、通史的なものから特定の時代を取り上げる論考まで多岐にわたるが、室町時代に特化した研究は極端に少ないのが現状である。その主な理由としては、室町時代は鎌倉期の仙覚が付した新点の圧倒的な影響下に置かれ、新たな訓の研究が大きく進展しないこと、加えて資料の大部分が抄出や部類等の二次利用を目的とした再編本であることが挙げられる。仙覚の理論的かつ理念的な「万葉学」を基準としてみたとき、右のような室町時代の編纂物はきわめて没个性的であり、従来学問上の価値を積極的に認めがたいものとされてきた。

如上の事情によって、室町時代は万葉集享受の研究史のなかでことさら等閑視されてきたのであるが、小川剛生氏が、『部類』は和歌のみならず、写本の時代である中世の学知の符牒である』(『中世和歌史の研究』塙書房、二〇一七年)と述べるように、万葉集の二次的編纂物が多数編まれたことは、時代を反映した現象として捉え得るものである。従来の研究が、鎌倉期や近世との比較に重点が置かれ、室町という時代そのものから幾分遊離した形で行われる傾向にあったことは否めない。万葉集の部類本・抄出本は、中世的な部類の営みの一つとして把握し直すことが求められるのである。

本研究では、これまで万葉集個別の問題として捉えられてきた事象を、改めて室町時代の学問史に位置付けるべく、その端緒として、いくつかの作品を取り上げ考察を行うものである。

以下、各論の概要を記す。

第一部では、「再編される『万葉集』」と題し、延徳三年（一四九一）成立の万葉類葉抄について、その基礎的な考察を行った。同書は、「延徳三年依勅命部類之／権大納言藤原宣胤」との奥書が示すように、後土御門天皇の勅命を受け、当時の権大納言中御門宣胤の手により編集された万葉集の語句の部類辞書である。万葉集の全ての再編本のうち勅命による唯一のものであり、その公的性格は看過できない。また、宣胤は後土御門天皇の主催する連歌の連衆としても同時代資料に頻繁にその名が現れる。宣胤が天皇を中心とする一座の構成員であることは、類葉抄編纂とも深くかかわると思われる。同時代を代表する類葉抄の分析は、ひいては室町後期の文化動向のより正確な把握という大きな問題意識の解明にも資するものと考ええる。

室町時代の万葉集の部類本における採録歌数（句数）は、室町初期頃の万葉集撰要佳詞（编者未詳）の成立以降増加の一途を辿り、延徳三年の同書を以て頂点を迎える。同書は、中世のみならず全時代を通して、部類本として最大規模を誇り、また他の類纂本に比しても多量の複数訓を残すほか、先行する様々な歌論・注釈を書入れ、宣胤自身の私見も見える。校勘資料としての側面だけでなく、室町後期の禁裏周辺で万葉集がどのように享受されたか、その実態を伝える資料としても重視すべきものであるが、多くの室町期の万葉集関連作品がそうであるように、断片的な指摘や研究はみえるものの、本体的な検証や調査が加えられず今日に至る。伝本分類や訓の性質などの基礎的な部分について、渋谷虎雄『古文獻所収万葉和歌集成 別巻』（桜楓社、一九八八年）の解題に指摘があるが、渋谷自身も記すように、その内容は大枠を述べたものであり、なお詳細な調査を要するものであった。且つまた万葉集の伝本や訓の研究は近年めざましい進展を遂げており、既出の事項についても、最新の成果を反映した形で新たに検証を加える必要が生じている。

第一部は、右のような問題意識から、類葉抄が使用した万葉集、先行する注釈の受容の実態、宣胤自身の万葉集研究（どのような価値判断のもとに訓を取捨選択しているか等）、さらに類葉抄の伝本系統、という四つの章から構成される。

第一章では、西本願寺本万葉集の貼紙を端緒に、類葉抄との関係を論じた。類葉抄には、早く佐佐木信綱によって西本願寺本との可能性が示唆されており、本章は先ずその説について検証を加えた。西本願寺本が巻十二のみ系統の異なる取り合わせ本であるが、この巻十二の歌の訓の比較から、延徳三年当時西本願寺本（現存）が禁裏に蔵されており、かつ宣胤の類葉抄の底本として貸し出されたことを論じた。西本願寺本はこれまで音信日記（証如）を根拠に、西本願寺に至る以前、一時期皇室に蔵されたことが指摘されていたが、類葉抄との関係を確定することにより、書物の動きから史料の記述を裏付けたものである。本章ではさらに、西本願寺本にみえる異本訓を示した貼紙についても

言及した。西本願寺本は万葉集の伝本のうち、全巻を有する最古の写本（鎌倉時代）であり、また今日刊行される全ての校訂本の底本に採用されるなど、その重要性は言を俟たない。しかしながらその貼紙で示された訓の素性・年代はともに未詳であり、扱いの定まらないものであった。本章は、貼紙の訓と類葉抄の古訓注記が一致すること等を根拠に、類葉抄の編纂に関わるものであること、貼紙の年代は室町時代の延徳三年が下限となるとの結論を示した。

第二章では、類葉抄に多量に書入れられた仙覚の万葉集註釈を取り上げ、宣胤が使用した万葉集註釈がいかなる性質のものであったかを論じた。万葉集註釈は、平仮名本と片仮名本とに大別されるが、両本間には、本来片仮名本であったものが後代に平仮名に書き換えられたという関係性が成り立つ。現存の平仮名本の多くは刊本の写しであるが、一方で、平仮名本の中に、最古の伝本である仁和寺本や冷泉家本（いずれも片仮名本）と本文的に近似する伝本が存する。特に国文学研究資料館本は仁和寺本や冷泉家本の欠を補完しうるものとして注目されてきた。右のような古体を残す平仮名本が複数みえることから、小川（小松）靖彦氏は、平仮名本の利用が孤立した特異な現象ではなかった可能性を指摘している。本章では、以上の研究史を踏まえ、その表記、内容の面から延徳三年の類葉抄に資料館本と同系統の平仮名本が使用されていたことを明らかにした。これは小川論を裏付ける事例であると同時に、平仮名本が実際に「利用」された痕跡としては現在唯一かつ最古の例となる。中世の記録類には、屢々万葉集註釈の名が現れる。従来これらの万葉集註釈が具体的にどのような伝本であったか、その一切は不明と言わざるを得ない状況であった。そのなかで、本章が指摘したように、勅命により編纂を進めた宣胤の手許に平仮名本が置かれたことは、当時の禁裏周辺にいかなる万葉集註釈が存在したかを示すものであり、重要な事例となろう。

第三章では、第一、二章を踏まえ、では宣胤自身はどのような態度で編纂に当たったのか、宣胤の万葉集研究という側面からの考察を行った。類葉抄には西本願寺本にはない様々な非仙覚本の訓が混入していることは先の章でも度々述べたところである。この点につき、本章では、宣胤が類葉抄を編むにあたり、使用した万葉集をそのまま引き写すという態度ではなかったこと、同様に先行する仙覚の注に対しても盲目的な引用を行ったわけではないことを、具体的な事例に即しつつ指摘した。室町後期の万葉集享受の動向は、つねに何等かの形で仙覚の学説の影響化にあると言っても過言ではない。類葉抄も当然ながらその範疇にある。一方でその書入れや引用を丹念に追うと、必ずしも仙覚の学説に全面的に依拠するものではなく、様々な学説を参観した上で、最終的な訓の取捨選択の判断を下していることがわかる。主たる訓とそこに傍記するべき訓の判断も時に細かく行われ、仙覚の学説に疑義を呈する箇所も見受けられる。類葉抄は単に万葉

集の語彙を類聚したものは言い難く、むしろ従来の研究を集成し、再編成するという宣胤の研究意識の下に編まれた歌書と位置付け得る。

第四章では、従来の類葉抄の四系統分類の再検討を行った。類葉抄の伝本は、その殆どが近世に下る書写であるものの、現存伝本が二十七本、かつその多くが完本という恵まれた状況にある（刊本はない）。従来、これらの伝本間には本文に系統を特徴づけるほどの異同はないとされ、一般に行われてきた四系統分類は、一面行数等の書写形態及び奥書の有無によるものであった。しかしながら、類葉抄の伝本間の異同は、書入や訓の有無、本文の異同等多岐にわたり、一つ一つの異同は微細ながらもその数は多い。したがって、どの系統の伝本を使用しても大差はないとする従来の認識は再検討を要するものである。そして、以上のような訓や伝本の研究が進んでいないことの問題点は、最善本、ないしは依拠すべき本が未特定という一点に集約されよう。この点は今後の研究の進展を妨げる要素となりうることから、本章では、最善本の特定を視野に入れつつ、本文に依拠した伝本系統の整理を試みた。その方法として、大永三年（一五二三）の現存最古の奥書をもつ十行本の尊経閣本を取り上げ、尊経閣本を除いては唯一の十行本であり、かつ完本である伊達文庫本との比較検討を行った。結論として、両者の間には特段近いものを認められず、むしろ尊経閣本は流布本の十二行本と近いことを指摘した。本論の認識は、今後の伝本系統再考における、基礎を成すものと考ええる。

次いで第二部は、「室町時代における『万葉集』享受の諸相 ―類纂と抄出に関する諸問題」と題し、室町後期から近世初期にかけての万葉集を巡るいくつかの事象を論じた。万葉集の享受の場には常に万葉集の伝本二十巻が存したわけではなく、その座右に置かれたのはむしろ類葉抄のような部類本や抄出本であった。この点につき、万葉集の再編本の具体的な利用法に加え、背景にいかなる需要が存在したかという側面を、漢和聯句の為に編まれたとされる韻書、和訓押韻や連句文芸との関連から論じた。

また、第二部では、万葉一葉抄（三条西実隆、長享三（一四八九）年）や三条西家の万葉集の問題を取り上げた。万葉一葉抄は、類葉抄完成の数年前に成立した、近似したコンセプトの部類本である。両書ともに採録歌数が四千を超える大規模なもので、短期間に斯様に浩瀚な万葉集の部類本が相次いで成立したことは、室町期の文化動向、万葉集享受の動向を把握するうえでも示唆的である。実際、禁裏周辺の動きとは別に、文明十八年、足利義尚により、三条西実隆と中院通秀が「万葉集作者部類」の作成を命じられている（実隆公記）。実際に完成をみたか不明であるものの、義尚はこの時期、万葉集詞を使用した歌合をも開催しており（三康図書館蔵「歌合 文明十六（一四八四）年十二月」）、公武それぞれの周辺で万葉集への興味が高まっていたとみえる。

第一章では、三条西実隆の万葉一葉抄について、その研究の現在と課題とを論じた。

繰り返し述べる通り、室町時代が仙覚の影響化にあることはこの時代の前提を成すものであるが、一方で、同時代における仙覚その人への認識がいかなるものであったか（權威として機能したか否か）、仙覚本の諸系統の内いずれの系統がどの程度流布したか、その具体的な部分は必ずしも明らかではない。そして、そうした問題を扱う上で、同時代に影響力を有した実隆の周辺にいかなる万葉集があつたかを明らかにすることは一定の意義を認め得ると考える。実隆所持本万葉集が現存しない今日、実隆が自らの所持本を基に編んだおよそ四千首から成る一葉抄は、実隆本を復元・遡源するための資料としてふさわしい。

一葉抄については、室町時代の万葉集の部類本としては例外的に複数の研究の蓄積がある。多くは一葉抄の自筆本の発見以降のものであり、現在に至るまで、伝本やその訓の性質について研究が進められてきた。そして、最終的に一葉抄の訓の特殊性は専ら実隆個人の問題に帰結される傾向にある。本論は万葉集の部類本を広く室町時代の学問史上に位置づけることを最終的な課題とする立場から、そのための基礎部分の研究を主眼としている。故に、一葉抄についても、実隆の所持した万葉集（乃至は三条西家に伝来する万葉集）に遡源するための一資料として把握する立場から考察を進めた。これは従来の一葉抄研究（ないしは実隆研究）と矛盾するものではないものの、万葉集諸本の訓との不一致をそのまま実隆に帰結させ得るか、先行研究ではその部分についての考察が十全とは言い難い。また実のところ、一葉抄の研究には、研究間で大きな認識の齟齬が生じており、ごく基礎的な部分においてさえも一から検討しなおす必要が生じている。今後研究を積み重ねる上で、基礎の補強が喫緊の課題となっていることから、これまでの研究を精査し、その課題と実際、そして今後の見通しを示した。

先ず、従来の研究でそれぞれに拠るべき本とされてきた書陵部本と京都大学を取り上げた。この二つの伝本は、渋谷氏によって本文的に近似するとされてきたが、実際には異なる系統であることを指摘した。京都大学本には伝来の過程で手が加えられ、その結果両本が一見近似するかのような様相を呈しているのである。また、一連の調査から、実隆本への遡源には、これまで殆ど顧みられずにいた石川武美記念図書館本や静嘉堂本の本文を視野に入れる必要があることを論じた。加えて本章では、従来未詳とされてきた書陵部本と京都大学本に共通する「図書寮印」の素性について、吹上御文庫目録（宮内公文書館蔵）に照らすことにより、かつて両本が共に皇室に蔵された伝本であったことを明らかにした。

第二章では、早稲田大学図書館蔵（三条西家旧蔵）「万葉集抜書」について、その本文の分析を行った。実隆をはじめ、公条、実枝と続く三条西家の万葉集研究は、その同時代的影響力に反して、その内実を殆ど追うことができない。他ならぬ実隆所持本が散逸

している上、前章の通り、一葉抄についても、実隆本に遡源しうるか否か曖昧な部分が残る状況と関わる。現在、三条西家旧蔵の万葉集関係の資料は、早稲田大学図書館や学習院大学、京都女子大学図書館はそれぞれに蔵されている。早稲田大学図書館蔵の「万葉集抜書」はその一であり、これまで具体的な調査が行われていないものであった。そこで本章では、「抜書」の本文調査を行い、万葉集の諸本における位置づけを行った。

「抜書」はその掲出された歌自体、万葉集の抄出本の一事例としても興味深いものであるが、さらにその本文は、今川範政が仙覚文永本に仙覚寛元本で校合を書き入れたとされる禁裏御本（散逸）との関連が看取されるものであった。室町後期から近世にかけては、禁裏御本や中院本のごとき複数訓を有する伝本が流布したとされる。同書は、三条西家周辺にもその享受の事実が存したことを裏付ける上で、重要な一本である。また、本章は、漢文部に付された訓点を本文系統分析へ利用するという新たな試みを含む。漢文部の訓点は、従来の万葉集の伝本研究においては利用されてこなかった要素である。

これは本文や訓から概ね系統が特定可能という理由に拠るものであるが、一方で、同書のような歌数の少なさから細かな系統分析が困難な状況にあった小型の抄出本においては、有効な手段となりうることを論じた。加えて、本来訓異同の少ない仙覚校訂本系諸本においても、漢文部を分析対象とすることで、より細かい分析が可能となる場合があることを指摘したが、これは、万葉集の漢文部が伝本間で有意な差を持ち、仙覚ないしは書写された時代や文化圏の訓点資料として、伝本研究にも資する可能性を示唆するものと考えられる。

ここまで第一章、第二章にかけ、三条西家周辺の事柄を論じたが、今後は各所蔵機関に存する資料の個別の検討を有機的に結び、三条西家の万葉集研究を総合的に把握してゆくことが望まれることを付記したい。

第二部後半の第三章、第四章では、利用される書物としての観点から、類葉抄享受の研究を行った。和歌や連歌が、政治的、社会的な色を一層濃くさせる中世にあって、万葉集の享受の実態はその背後にあったと考えられる連句文芸の隆盛や、時代状況、物質としての書物の伝来等を踏まえた全体的なありようの究明が要求される。

第三章では、漢和聯句の専書である和訓押韻を取り上げ、そのうちの類本に引用された万葉集歌と類葉抄の関係から、和訓押韻類本の成立にまで言及した。和訓押韻類本の万葉歌は、類葉抄からの引用であることがすでに安田章氏により指摘されるが、本論で改めて検討した結果、冒頭に位置する東韻のみ、類葉抄では引用しえない作者情報を有すること、さらにはその東韻の万葉歌は夫木和歌抄を典拠とすることを指摘した。さらに、このような典拠元の差異は、成立の違いを意味するとの見通しから、東韻が他韻目に先行して成立した可能性を他の単一韻から成る韻書の存在と合わせて論じた。実用を

旨とする小型の韻書の成立には、その性質上不明な部分が多いが、従来ひとまとまりの作として見られてきた同書の成立に、韻毎に時間的な隔たりが存したことは、このような実用書の成立について僅かながら一つの見通しを示し得たものと思う。また、和訓押韻類本に引用された万葉歌に長歌が意識的に引かれることから、室町後期から近世初期にかけての長歌利用の形跡を指摘するとともに、類葉抄が広く利用された要因の one に、長歌をも含むことが挙げられる可能性を述べた。

第四章では、大永年間に後柏原天皇の周辺で開催された万葉集詞連歌を取り上げた。室町時代の万葉集享受の問題は、訓や編纂物等自体の分析だけではなく、人々がどのように実作に取り入れたか、具体的な作品分析からもなされるべきと考える。しかしながら、現時点ではこの点に言い及んだ研究は少なく、未解明の部分が大きい。そこで、その端緒として、大永二年（一五二二）の万葉集詞連歌について、その連衆ふくめ基礎的な部分に生じていたいくつかの認識の齟齬を整理した。加えて、連歌中における万葉語彙の分析には、類葉抄の利用を視野に入れる必要があることを指摘し、万葉集の語彙が類葉抄のごとき部類本を介して広く利用されていく過程を追った。

従来の研究では、連歌の分析に際し、著名な一葉抄の利用を当然の前提として、また唯一の軸として論が展開してきた。その上で、一葉抄には長歌が載らないにもかかわらず、大永年間の連歌において長歌の語彙が全面的に確認できることや、一葉抄には確認できない訓が現れることが論点として提示されてきた。一葉抄は三条西実隆の著作として著名であるものの、その実現存する伝本は少ない。一方、類葉抄は伝本数の多さもさることながら、江戸期に下るものの、飛鳥井雅章の言説を収めた尊師聞書に、「類葉集は万葉の抄也。中御門宣胤の作也。勅撰也。希代の物也。」（近世和歌研究会編『近世歌学集成 上』明治書院、一九九七年）とあるなど、少なくとも江戸前期時点において拠るべき本としての地位を得ていた形跡がみえる。このような状況から、本章では、連歌と万葉集との関わりを考える上で、類葉抄が有益な視座を与えうることをいくつかの具体的用例を挙げつつ論じた。また、第三章の和訓押韻類本の証歌も含め、室町後期から近世初期にかけて万葉集の長歌の意識的な利用が始まると考えられるが、そこには類葉抄の流布が一助を成していた可能性を指摘した。

以上、本研究では、第一部・第二部を通し、複数の観点から万葉集にまつわる論を展開し、それによって室町時代の万葉集享受の実態を立体的に捉えること試みた。